鷹百首

鷹連歌

544
タ
6 90

鷹百首
鷹詞連歌

544
タ
6

鷹詞無作

鷹百首

大阪大學圖書

大阪大學圖書館
昭 21. 7. 13
184047

鷹百首　西園寺相国公経公御作

[illegible]

鷹百首　西園寺相國　公経公　詠作

鷹山にあさる林扉のしかくも世にかはりつゝ是を見ふる事ぬる

河さるこは食物は求飯や一切人畜不通や

紅牙いふつ人の鷹は出居といふこうくれて越来世てふる事す

疲のぶ志安して追落さなくくてい出すらぬ但一度追落

もとも ふ追ふもせ山るともしぬ

いふるに鷹の維後代てかうのふ世の所をかくさぬし

狩の言ことよせふ海の

はらしかし鷹のそのほる鳥とてかうぬめるふ説は侭しさい

あらしかしこはいふしもしとも也

世の中は鷹つまえいれの羨鷹は見不同のぬひらいさぞり

鷹とりとは鍋侭見つるて放さぬをこそ也や見よくて

捉えぬ世またふるゝ徒然は廿景や菊流は廿一景之
ごゆり山乃まふ出ぬこ人もなく胡々くぬかたのゆり哉
将らしてふれぬかよすまる我ごゆりま山とて家の見ゆり
しておりも煙とこえのは将ひ出こゆ山羽尾ひろう
こ人もみえかし家や
法鷹野草にふかける将人乃ゆかしてふるまでゑ家ぬから
もふ鷹こいたうふ鶉羽なる鷹ぬ事之文うり都
来て鷹草にかゝ[illegible]も有ち将[illegible]
しこいせこも鶉将ちとも草に鷹[illegible]ゆ
ことへしやのそ将の人乳ひかひ切て将鶉と[illegible]
鷹ありとこふる鷹鶉てゐり獺やふのぬ見家ゑこえて孫や
鶉将もおうし後ぬる哀さたゝふとの[illegible]家弟ゑに[illegible]

弟ゑてかゝ[illegible]ぬさぬかぬ鷹翅と[illegible]く世ぬぬ[illegible]
さ也き事我ぬ例く[illegible]ろきさし大さ文を[illegible]へ[illegible]
太ののこ[illegible]むや太乃公子もちりぬ事

餌袋乃こさ[illegible]の以鷹ぬらしさう[illegible]

餌袋よ[illegible]の以鷹乃頸[illegible]待事首は鶉母鷹[illegible]
をる事[illegible]ゆく[illegible]ち欲と[illegible]て着にも[illegible]鷹
ところふまる餌袋の[illegible]まる[illegible]

米山乃[illegible]乃羽かう[illegible]の[illegible]
米山は交野の[illegible]向よ[illegible]羽[illegible]
やふにりか羽と[illegible]よ鷹こて向乃山に渡る鶉[illegible]
より[illegible]送物かゝ乃[illegible]一文字よ[illegible]の[illegible]て
鷹をこる[illegible]之[illegible]の雨のさる鶉は鷹乃[illegible]

ごらんじて鳥をとりても加やう事ニ一文字ゆゑなりとて

うずら乃羽こそあれ

此なはハ公つくりし若鷹に椎乃本末にてもさもあらず此

椎の本末ニハ葉ぬ末ハ葉の本末ニいふ事にて椎乃

本末ニアる事なし但椎葉ハなく候ふるぬ耕栽とし

なり

さる事ハ乃〳〵狩場ちうなんともかくれて乃る鷹狩

鳥ハやうくて鷹のそうるいの毛するめたしと弟とやるる

毬乃毛ニハ額乃毛之鷹ぬ公頬肘そ川る毛や鳥やうくて鷹

促く客の毛なふるこ之鳥そうるニて事にもそ

ある毬毛ニ綱乃ハ住や客はし乃あく川る毛乃もの

うるる也

狩衣かぬとハいの鷹の毛ぬき事ハ人乃ためなりこ母し

白さげハ鷹乃尾之付尾乃下ぬ重や狩衣ニハ犬り

出肘の衣や餌袋ハ人の方へ出小も文常母もなる餌を入

さ候ハふう事や餌袋にハ御ぬさとこ候や首添頭額

小山のほうに女など乃ゆへある肘は女乃まへ給そ餌袋

さきの鷹女鷹餘いうくある肘餌袋を流して持る

まして志や袋ちからねまきなど女ハう見へ姓ぬ羽ろ

ふし狩乃鷹の忠代袋にもた餌もさうて取り仕る私と稼

てあつかれハ具鷹やうえ死するうなか狩かつ鷹にハ見事や

餌袋よう役ふハ代する也るるとさ忠作して国なみ弟もかまえ衣ぬ

弟なかうしも衣すかうるあつてもて山ふうさ作えそすむちむち

手にてとさしむき狩場の其を鷹羽杖をつふておかにゆるるが

凪ハ爪しくてさむき年ハ鷹が痛之引けを鷹ニハ鷹痛
あつきハ茶が飼ニすゝめるに菜と飼ぬ羽杖ニハ羽などにて
三年そだちぬとさつるまかり力のうせたるくなりにけり
まらや

狩にハぬらしたりハ此もゆするみなハいちにめぐる犬にふもなし
鷹にハ求ゆるにゆつられ村ゆ鳥立けれどもくにもいへしらるるを
ゆるさしにハふもさなりて狩倉ぬあらけの鷹をもあへらるかも
あらけまる鷹の笛羊の鷹之綱よりけるるゆかに杣からふ
はあるゆるとにハあらけにもあつハさる文青毛の鷹ニ
てもあへかるまる鷹とハあらけにゆるのいさる文青毛の鷹
立生まあり此毛ながら面の九迄初之赤鷹こまれもむて
母が鶴鷹にいて出て毛介母國て終日鶴鷹さるかへしらり
これが三の鷹ともあり鷹とも之得こと鷹あらう白

ふり鷹
うまとハつ
ふ狩あり
ちる山とハか
つる山の鷹
さなりられよちりて
山ありより在よいと
雨やニ子そ御鷹
山まいらり

鷹氣がさがなるよと紅梅母なるにも志得ともゆ何白こ月
まにハ人一家あり

らもなれ佗をし山らの志の鬼の新くくけある鷹の始あふる
肉さるくて肉が此も入けるるも肥てるとも乃ゆる
あり痩するを志をひくとやゆ

大せしる鷹とてもしる鳥なれ依草母もさなにる一へしもかに
ゆきいとゆみまして此ハふ器鷹などる後ふても此の化あれ
鳥尾之しとハ夏鳥尾より入ゆ四月ハ在にハりて七月廿日出た
やす四日乃しゆすまゆりのけしと續れめしも夜ハてまれ
いゆ着鷹こゑ一種ゆ文もし國よりと出こ後猶ありもいふ

鳥にあらをつれも
のいてとるよしけ
生ハたらゆえまを
にゆるあり之れと
いゆるこふあり
おけすりのえ
いるハこれなりよ
あるかたるたのある
まいあり

こゑ鳴ゆを鶏とよも後猿と種ありたりつるまたに過ちご
かるゆ鶴よしきありゆも唐が伐んいもえいぬ清をあまゆ鷹

御鷹とハ鳥にあはせて
鳥にあはさるゝ
小鷹にいふ事

御鷹さしにハはらるゝや鷹もハくいふかよりしてちい
さ北鷹にあり大鷹にハなき縄とて四十尋の縄あり

鶉小鷹ハやまくれて下に北つるハさ渡北や

鈴ちうたハ大のしらふにかくれ駒せなりぬる所人
犬のしらやこそかとつけいはるゝ人ちゝかふるかゝりて
かとなるいふとけるゝ鷹の送り犬のことつけるせ
ふしかも日もなるにかゝるゝ鷹へハ鷹もなそかそて

飼代袋にハ志ることありてとらへてかつる狩場の袋ハふちに
六あふるとハ志ゐらぬよくふてかつてあり鳥や

樋の出渡鳥もつりとのこゝろまかせて袖ちる露地に濡
こ北流ハ小尾にそ大は本かゝにうめ山口しく鳥ハあるら
こら流かなにそはやしのことにかめ乞のへてのしるやらいこ
山口の神をしるふつりて大せうへて山神せ答や
まもるそ山の神せふつらちつけとハわれそある

あかなふに狩狩ゆらん小鷹狩ちら北尾ハ霧ちゆくにもし
ら行やらたゝ一よりにまるらいぬらし始てつるふハひさら
一よわこハ一度や始て鳥をとれや
着鷹の乞北ちらとおりふハ流ちふ付そかハ山ころりち鈴
鳥さけひの整や待らん鷹人のむつひハの罷にちたこれハ
鳥さけひハこハ鳥つそハ鳥らくと三度よく人よ常なる声
又いとこのまさやせこハ下りれわる人ちりとは三ハ山の峯に人をとふて鷹鳥
みこハ鳥のゆくるこのこゑ小人をとまれ鳥鷹北行
乃わ忍とこさするよおらせしるめ
りるきとこと常め

のりなえぬ維のくれしもあくれや狩杖ちうたに北りまさ許本
せこかり杖られ下早とこかや狩杖といふ北の候のある杖ありたハ鷹志わりの笠乃くにくりて
狩の杖や鷹狩ハ笠北くの峯わりふくりて北るこ
きりぬかり杖乃さきのすゝかをと八字さたしとなるかり
大のまもとまも目のみりにさ侍や

高原すま交野はしめの御狩場ふし鷹の鷹北あつかもりぬる

鷹の習の事なとをとりのかたへよせてあつかひあつめたるの鷹屋にてそさなと白くみ
えておもしろき事なりけり
まつらふハいかに白ふ羽ハ尾への毛のいろにてよし
ならん

久𪀚なとをたつるにも駒にて駆ちらし野人のあまた人
鷹を出して[illegible]これあり
此事をとるといふもこれにかなふ事也ハ地にをろしてよし
又もちとる時ハ鳥まてとるの大鷹小鷹ともにあるへし
鳥もたぬをたつるに入草にてたかへるのをとゆる鷹のゆるさい
鷹をあつかひ人々もてはやせして[illegible]羽おもにして[illegible]
草の中へ鳥を入れて追入をと入草といふ又ゆきをいふ
ここにつけても[illegible]
右川にかられてそれハ鷹こそうちにてよくかつるとも
又ゆるとこふや
つかいころとかへくろかるはこそれハ白かるかに
しや

狩杖ハこぶしうるかしもおるかく人ハころめぬ神のかたへいこ
鷹かするにハ狩の鳥をうハ狩場のいうのまうへ成とするる

百数の日次の人をとりにあかすかりめぬ狩の場をかまえる
標野・野は日次の贄をとるにいりて余人の
同裏[illegible]の鳥はなと白き[illegible]
鷹仕まゆ標の野標野といふ[illegible]又禁野も
[illegible]鷹うるするをいふ[illegible]又大和国[illegible]野あり
の狩場するにいう
同かや

同小みよこ草にかる鷹の事ふいちとらすへき事也
草とるとは鳥から草にて追出して草の[illegible]
[illegible]
草とるこふ[illegible]入草の方へ[illegible]
[illegible]

ふつゝかに鷹狩のひねりや

谷深きうけかゝりたる落りあひてつけはおさへ出やうすつゝめ

白川鳥と草ふるゝ鷹にくはへちて當もすせり みえけうけ狩て

引よせられそのわらもゆるしてとらや くつをとこ六小鷹ハ

小鷹ハ雉の羽のれてれ出や くつきとハ雉の鳥の左の脇を

以雉ハ脇を刀してあらてきもとゝろ出して立ふれきろをは

刀をれたしてふかく肝をとれて飼やけしとせるこハ云ち

あらるこゝろありかん鳥ハ右の脇おん鳥ハ左の脇ときものあり雌雄はわくる心ありけれハ

あらはれて難そまくけしとせられ

もしとせるなり

太とにはかをるたなさし日つけぬ己ぬともぬいかし狩人

太ぬるはといふはもつかく後にされなとくや

ちふるも守れもふる太のいかしいや鳧かつくみつ付く

けふるといふもし鳥と文狩のあとよあのおそ草にたふる

はしめて鳥につかれかくいまたハ鳥になれて落てかれいる

もなつけい追鳥狩さかく草叫かる草やよらつてそろ

とふるのにこれ鳥追鳥あそてのうしを鷹をえてつれいやをれはとつて

きと太よつてたつかかはれハ太飼も太とはめて志けくお飼を

志らくさてひとくしこふ飼とこ縄とそれつ小食て餌のやうに

かふるゝもろていぬるものにくとふると犬飼こハ犬の食ぬ

もとのかふ

や犬飼袋ハそのもらていとい病ハや袋や

狩人はとつれはあつる鳥とハ鷹けしれて射ておとにあり

あ鳥とハいつく鷹を追かれく文狩人もちかれけくさ

よよわれて犬くつなくて中にある鳥や中に打おとして

あり鷹さつとるゝハ味ても射とつて鳥もきつて射りをとよりもそれ

からる茅ていつけは追鳥をてやおとてやら文ハ何も

花の雪ちつて射て おとせし

迷ふ鳥をさ狩るのハ何しれとてや

鷹の羽白

太飼ハさすらにえるしてにけふ狩杖ゆをしけつきこへてゐる

むけかつ

たゝかハいかにしすへてそれ帽子をとせる体にけ斧をとつて偏する物をとあなかくらし

みゆる野ハあつひてよ刀人投る影にないえの鳥の尊もくらん

しら文ハ春

あらとよる冬枯のよしはなつけまちたてかいぬこのよ狩らつけり

柳かあり

古い葉　楢葉

夕霜や雉なくこゑかつるさあつくハせきてかしつ谷ちをあらん

いさゝいとは鷹の事也 其人ハ鷹をかゝへて手をあけて又むねのさん飼し
より○ふこはし出る鷹犬こそきく飼手や又無なぬ
野もせ常とも見ぬしゝかまや

鷹ハ本居鳥ハ志宗来にめぐらかす籠をつけてぬる犬乃ねかふに
らゝすとて雉鶉乃かすなるものハもちつけてそれにけにかけをかくしからち
落かゝりとハ鳥龍のかく草にかけてけるをそして
犬乃のえさるありすこしもあつみぬれち鷹乃ふかくて
そのうハふもとはしらさなら大鷹乃まへとまへとまへし
てつを付かぬる人けるかいくるとハいふと也

鳥つまぬむしのミ○紙ヲさしてたとこかつくるおほくハらら也
あるこころ鷹よつまれてもとねとおさへさゆるし
山乃嶽と河こうぬるをこ紙を作ハらふ屋とまへさせち
おちるにもさるいかやしねる犬乃ことにゐるへ呑告し
おほ人のかしらしゝ斗に

ミつかゝるは鳥ふるさしとねさるもからてこゆる鷹みな羽なさハ
嶽きるとハ山乃ミ○成ハ山の嶽をいふもとにかからにて
こゆるにハ鳥ハ鷹毎かけんとゆるにハ鷹ハ領しからち

わかミかゝる鷹もかゝるかしこ鳥にまたとかれていゆるものこ
羽うるハ左羽右羽とてあり左乃羽紙とち大なる羽をかゝる
なり

翁たゝしにみるとあしきとて出嶽河きたむなつかせはける鷹人
乃とかへて尾をから鷹となるらかうかく人とるかゝかゝおほかいを○こ
のかゝる人てハ鳥紙たかうこのかくこえみとるこハ鷹将ハと
鷹ミるさのかゝる鷹ハ鳥をみつけてまわりとて鳥ことハ放鷹志ゆるハ二年なとも
かまゝて後ろやらまて鷹はける人つくもいふなるや

出将人晴されけるたら山のくろおほいくふもにてまつく根を
野されたハ山にて志らく毛とかへて年志られて尾鷹
之をるる鷹ハ當毛○乃出ぬらや野みてそこにちかるゝ之巣より
あてなのはよりこかへされかゝれてさるくめるもを鷹こにゝゆ
當年かゝれともある鷹をハよきにゝ

すゞめかたこゝろ鶯にちも見へて行かふ乃類ちの鳥なりあ世めの

鳥乃何とかや野又和國

王子ぬ殊さ凡けら鶯山乃谷の梅にあふ人毎めかと寄らぬる

いろ鶯ニハ
黄ハ鶯ニ書ものも
赤キ時ハ黄なる故に
常歳のいろや

はるかくも落らるゝ山ら名て山乃雲にたちとめ年すぎん鶯をと

文野編ニもかくこ文粹鶯とハ黄鳥ともいふ

鶍風集乃吴名や漢小あり

あり乃浦に乃枯野の死せて地乃神に始ぬ山ゝこゝにはひ鶯

山鶯や

かゝろ鳩も鳴きたぬかる枝の梢ちち花乃日にもたちけり

松乃梢乃鳥牢付て啼は名なや

出かさゝの前乃梢よりうつて啼くるへ方鳥のこゑ

たかさ北に花や延喜御門乃御時鳳輦ある乃梢也

てかりやいか乃ら木の鶯もちへさを始てよ乃この世すて

はる出乃花の梢さし鶯ある八千たん有ハ弟寄にらや

草枕久乃鳥ある南ても浮乃待場也ある始めて家海

ゆかりらこゑおのた北下鳥て待場乃こちゆるさへ見さく

たゝ乃もとゞらたゝへぬかたるの事乃黄ともかく鵯と書文撰ニ東

旅行の造幹すこの清あり

たすなそて
ありいよさす
ありあり鶯にぬきと
いふ初め大鶯とと
いろ諸まうけ
こしくふるたすとさけかり

氷室山梢あらの小鷹待田國けるにわたりて世見る

梅風乃鳥毛乃彼のゝけて袖吹乃さ南ありらるゝ人

入鶯鶺ニハ馬乃あ鶯のさへてうけて鳥を立て行く

なき始よめ

夕さ浜ら梅乃小鶯若見るに世も鳴るにまる枝生れ哉

草見るハ同すや

嵩米川ゟ下ちふうつて行ぬるハ行ても駒ハゆるさゝ之まぬ
一よりハかんならしぬけ追捲(様ゟ)に鶴ゟ小田ゟうつめ
一よりとハ一度あんまるたなるしこハ狩也一よわとも一合之一より之よりも十より
といつて二ゟハ二より三ゟハ二より[illegible]大鷹ハ合物ニ有[illegible]大鷹ハつとさりける
るたなるを給ふ事之文外て大鷹ハ合物ニ狩ニ有ち[illegible]大鷹にたなる
とよりちかつりちりあゝをけ[illegible]つもたなるハいもたなる[illegible]
あくせちし山ちさ一しとり八初て仕まつる法めこハ稿とゝりて少狩に[illegible]
ほみとこえなんや

一鷹の川しおそく集て喰ととりつめ乃ゟりとニや
大鷹ゟよりちかふ綱やりかの野ゟれ[illegible]やめ狩久ゝうけてよし
　同小鷹乃綱おちハ行しきし鳶鳴出まや
その人ゟ鶴のおちぬあるいらんとゝるまと乃人わふ物に
うつのおちすつのおちにハこれも当の[illegible]
然鷹乃まゝ野を行狩衣こそぬゝつる狩ゟ也まちよ
前は月まめ
狩ハ家にたおくめも狩ならさせるそりたつせん[illegible]野鳥を[illegible]

ゆくや御長ゟおもつ狩二ゟ一尋うふも唐様ハいうちた
かりおる事前にあり狩めゝよしまよ出てあらゝか
　稲つゝや
きこのつこれりハた鷹のお鳥ちりきとりきて[illegible]
是雉ゟ小鳥乃まゝ狩の狩衣ちゝまちよとる秋なんすまぬ
夏ハ鷹乃まゝそゝそてけまつも秋伏お秋の[illegible]
や鶴乃夫こ是鶴こ[illegible]や

よいの子小鷹そゝ其小鷹狩霜ちゝぬ子笹[illegible]
剛ゟ物をとりき[illegible]又小狩草ちかとそ雉の[illegible]
きゝこゝあふハ羊頭の狩立て合之ン
[illegible]
天保ハ来りこゝ大ゟぬつ[illegible]とるをハ狩かえし[illegible]
ちまりこハ鳥[illegible]
家小鷹ゟてあゝ[illegible]ちゝるこ[illegible]
家[illegible]よあるをとしぬ

並妙人よ上毛もて、毛ちと手向並て、ふ乃狩場の神ふつり侍り
鳥狩れ妙れハ鳥乃也しろ妙毛なおはいとろ毛こ
こ女尾妙人よもて、こと尾手妙ともちる毛也やて此神也
ふ川乃ち中の雉よかゝりに大鷹こふいふいかれもあり
氷こ系乃鳥妙ろて乃やとれは鳥るすとろつる谷川乃ハる
狩ハろるれハ乃こそ妙て、雉山よちかふ河もてくらまて侍り
いて山と、山乃おくろはし入狩く出る也鳥こてさすこ
出い入つゝふつくて狩の草をとりてけくるるいもこ
むもふ妙ふ谷ちもさくぬ乃ぬ鳥也こくてすれ鳥也ハ妙り
鷹乃鳥もこゑる必乃ちこうけて鳥乃血のくきさたこう
おいぬおつふなさまして飼や
やまておつてハあつ、妙ふ山ハ大鷹の毛並みよ浮侍り

鳥もこうの中ハもちもとれて飼
出て鳥乃口をも持て飼
おくハ餌なとも持て
くちつかれハ鳥を
ゐるやすらいハむちて
くちとなりハるふ
きも持て飼や

うら山ちゃハ鳥妙なるとかくハせて
鳥妙てきてはやかにまりと常ハたつるをわつむる也
毛花こらも毛乃もつる妙やこ常に鷹狩の取よおく待中ゐ
山ちこもちら鳩まうれ妙ておいつれハ乃たか本に鷹あるつ
かろハれこうら鳥もこ鷹ハつれあて落もとめ
あつらこハもとまれ鳥もとあてれハたたとこうなり
大うしのちうやもてゆく狩鳥もとまくる鷹もれハこなとて
大飼大妙ゆるりハとうえて鳥乃あるをとかく鳥をとなく
ゐるもとむしていうてのかふのうまにまとあるハ
大鳥乃あらね
よもまうれ鳥の
ゐる也ともしく
下てまりちこさ鳴もこてふける鳥かなくに鷹也もあって我とる
下て下くえこるとこ地よおしさまして鷹也
れちこ人ろ草杖こなれハ人われてくうちて鳥か羽妙ねかれて
大はちかく鷹もゐこぬつれ狩ふこ鳥かハいよ鳥もこなしいまり
大鳥乃わう乃ねちりて
ちりてけりれハ鳥はおくとハ鳥あうこ大妙知るめや鷹もゐハにふ乃ゆかこ
とうるのてあるよあるをはちなり

犬こ鷹ニおかれてきたるをかくて山にあるや

元ぬつかり鳥なといろけれハ川くの鳥にあらしかあらしかるそ

ゆく鳥なとをハ鳥にといつけたるとはかさ

大のしらハ山にある鳥鵜年之鷹も鳥もちかくして山に

とそて見鳥をこの

あしらひてつけるこれ先物乃名鳥の名にしあくとよし

こゝかハ羽乃さくつる

いろ

山よりも射ておつるをこそ山にハなりにてそてけなれハ

鳥てゆく鳥をおやまてかくかくして

あるハそつかふせきらんあつま鳥ハかれのさハはしりのハなる

あはれくしにおつてあつまちかくいふるあつまし

かきりや

尾乃毛ふといつる鳥につなかれくまりにつるきて鳥の尾なる

流ありてとハ地くにいる事之本あるかにあり巣に入と

のいやからしあまるこれ乃鳥鳥さまかそつれハら鶏鶏する

なかるといとハのしらぶのたちさにといあるてやおらくきてりけハそれてかさなるなると

いうつれをとるのいやとし水鶏尾とハ水鶏乃羽のかれたるこそよろしく

とそ鳥とておらく

きらむにおきこうらこれくこと▢哉

朝明乃鳥あすんいらの▢▢鳥の声すれのきとハおこけ乃人ふしの

白尾流く年一条院の守行幸乃御狩の鳥古宮にても

ハおくのまうしのたけ源頼朝に上総国二あつて白ハ

尾のそ次々の鳥尾乃上に白かなはれてまいりこまれハふ

鳥あるなとハ字の上北門の不宮の時源頼朝之同乃白

尾乃鳥ハきりねとも色ふかさに尊てかゆらんと仕へりしけ

より白尾毛流くく

色なくまいは草なるに山にかたちのしる鳥ハ咲くもさて大鳥

鳥能乃ハ鷹をきて乃なくとそて鳥たるにするさくあいの

とも此時乃御やおほ列化乃か、とうそそわる同乃や雛乃ちかくも山ふに

ままこりさしてこしてしぬかりしてあくとかれにさまとは

らふやかあつさくかくさまとあって鈴乃子ともおはする

乃すなお波をもする事也

やき原なつけて鷹はすつくよりて狩立て声もさきく
鶉もしやや稀鳴より二ハ早朝母郎する鶉も狩ゆなといふ
狩られ中といふ作るや

あさ草乃葉あきとも原の色鶉たるはさまに起きいちそれ
末かくに籠しく又りける鶉（アンサン）あるゝさるをハおちはみふしや
あはさしもあるさしつゝ山てあるうしろちぬいり
作りし日あり昼や作りつて夏朝より生ち鷹之栗鷹
乃作りいふし

太乃狩志りかなりて狩衣乃ありやさるに鷹か丹ありける
もとこ鷹はたて乃鶉にあいまつや狩とらとらに入らいふなり
はもさう門こハ人まも鷹ふもかくれてけるり立鶉かり
露も原狩乃朝野の小鷹狩哉まかり神も羅らもとまり

慈鷹乃おかわらこゝのたりらしさる毎とゝぬもおかりる狩せや
これらなしとハ鶉と鷹と鶉とも飛りゝ古飛りいへるこゆる
作鷹とあし椎乃ありいは飛りゝへいゆゑやうなることもちら
すし鶉こいかす八七月千四日一葉夏乃哉をあし狩りし傳乃
さらしとや
鳥屋をいつさせなり故母はし鷹こふふ古文
夏いろりとる宇とそしたりこゝある鷹の哉や

夕されち——
夏いろ秋日ありとりの花ちかをとるなり

右以相伝秘本写之畢　文明五年三月朔　上泉
御易之時如右写之訖　上覧既他不可流布之

明應六年六月　日

一 赤ハ鵯と云生得鳥尾髪を生てつるなり　きつきつ鳥
禄ニ成ニ成　又きつ鳥　きつきつ鳥又きつきつ鳥落鳥
なり

一 屋殺尾ふのまんなかなり

一 巣鷹と云ハ大鷹よりうまるる也　又鷹に人餌をかうハ鷹也
それやけ故母霊霊乃法也　鷹之ト三と

二 鷺詞 連歌

佐保姫の鷺やあらけの山かくれ

さほ姫のたらちねは春の鷺ハしまえなりけりや

あらけ百首よ入て鷺山なきれハ霧ハ鷺の和歌

よくなりけれハ歌などよみたりて文殊に帰る

よ此ふとかくしかましれハ見ても山見えず

かゝみなれハ歌しかこひなれ

また深き鷺此まて鷺まさなし

これハ白やふしらかみ南さりて南白木白七不白と

深山白ちくに事あり口傳る

あやしめあり場の事にていふさからん

かゝるふかくあし鷺のかしまし事

けふもまたれのまつ床木乃か也
梅もすゑ鷹乃時の咲なるらん
弥たなく風の音に乃めし山
鶯飼乃山しらるゝ鳴る声なり
谷の山乃山とはあまちやこれより鶯初や
足高の大明神頭之七鳥なかも世にふる始ル
なり
あつまりて花はなりつる
鶯もなゐてふさ野鳥さ門笹ゝめ
ふさ鳴や
此鳥乃待とのあまね給らん
其たひとしとふの鶯のきしく草

草にほむいは門まいま鶯のうちてはしりまるこれら
出ては鶯あるの草にてふつるや鳥あかりけれ
交也い鳥洲鳴り乃ゝあこ
とりのゝあるい鳥居足之あこや鳥まゝあ給ふ
ある也へなり
即待よ侍たゝの文乃徳あり
君ゝおなと舞と草いとりける
鳥葉木乃むと大宮百前母ある但神代よ其本ハ一
や神稱まく是等秘事大ゝ大概其蔵之かけやう
以下を細書ミ
桐立鉦の下に鶯の巣なれ
鶴の水乃水たら花業や水之章乃出れ切口にたる

まくるものや銅の個所にあつく
柳乃露ハちるものもなからん
これも茶乃ゆや大方一銘恵水や是也異説有
よもぎよしよるもよる花沢乃水とハ女子に秘伝する
る二条殿のほかなし
蒼鷹も風なりにはなるまじ二句
しら露とおもしむ桜にうつる人
鷹ハ従にともをあらしい事
花ハ春乃はる番畑百舌鳥あり那須乃北山すそ也
是は竿や仕付けて関也
花に紺なさして見ゆる息代衣
ゆりも涙ぞるくの花も白鷺

たて意案したる事もなからん
衛とハ呼声とかくうたふとよふ声也
今年高たつ人ゆうみかるとわかく
もくはらゆりし鳴乃おもちえて
住れ有る声やうやうかに声て高らん
それ此世にめでた命ハ河よりこそ
つかうるかゝる乃かとそして道のつくに
旋毛とかうる足の所ニ通ぬ席にはしかれたる物也
物おそろしとうたふとる夕くれ
秋なる夜ハ人もうるさき乃小鷺拾
栗栖や山城也小栗栖ハ宇治也那賀の郷也旧跡は
いづれも山科乃所也

露ふかけなほそすゝのしのみつゝ
鷺塒よりくされ神女り月出る事
生さうりにうつかゆきかしたし
見えければさこにふるゝ乃山の下
よはくこゝろや
あし猪乃せにかやうに伴ふ
霞ゆふつる鷺のまはりふるゝらん
葉我をしてはぐ草乃名とこそ
すゑ野乃鷺雁乃雪はしらねども
七こゑ○まつ海辺より乃こゑ人
七銘こふとあり一条院乃鳩尾二ばかり
小乃篠はし乃鷺のすがた

さもあこ鏡あり一首ハ鳩尾又ハ烏尾鏡ともいふ
たかしきやらんこゝにある
風ちかくに門入鷺の首けり由
ゆかたる風とは股の風ともやふ人ときそゆかしき
もなり
此ちりうち五月乃比
野ち積雄略天皇御狩の時鷺をとりけるに
此ちは鷺こ名はめくら地はちてとりけるゆゑに
は鷺かくれたりしろのまにあり是にてされ
知らるこは鷺あれいあ乃中りけるにて
見るてまつえし
又とるは鷺鏡人もとなつけてまへと

まつゝ孫乃芭蕉ゝあかれて〇ちる
孫乃いさゝかも蛛の芭蕉も羽ッかに孫までも
鳴なれとも春子を愛で孫ることゝし孫の春も
わりなけれ同年や
居本ましき哉人ゝりの年毎て
世ゝとはるかの名ぬゐ哉さら
ましらふの哉作られて此句をり
流句あはしきこのいかに哉久し
流句は東天竺唐此国日本に鷹なり新集哉
縷みゐる金羅錦繡と切れて造くる哉乃兵哉
いつらん年ぬ
吹ちらる此染めの鷹乃も蛇の絲をそれ

みつ哉乃人も鷹哉梅花から
絵描として銀の下にあかりよく掃金羅ゆゑ
造るゝ子細あゝ
此猶人は卯ちらる年出しく
ころ乃ゑはもかけて天人
高き事は門最の人は綱取ける年
ほうがゆるも八重乃家しきう
ふりなるもこちら哉哉文ゝ鳴尾にゝ毛をつかり
てさけら登出もの君家に漆る梅も手ちる
やゐ
吹ちる風ゝまつ梅乃花も乃人ゝ事
さきつゝ花ゝとも梅哉さや鷹る

出羽国平賀といふ所にある鷹又は鶴鶉なり
といふ様く名は毛一夜にかはりて歌の鶴鶉と云て
かりの上くになる故紅の鷹といふ也
みちのくのたかもしもふしもちも出羽様
鷹の尾羽と背鷹の青き所やあり細か也
鷹場の山は浅みちのくもさま
霜とけ白筆よりかりの文れありて
かりの羽には鷹にこし様なる所の尾や出よりや
さし様にかはりけるて白き毛鷹狩の役にかれなり
又もとり鷹ありの又からのこしとく
鷹ものの白きをかなく白上毛ある白きといふ也
袖さしよ風のさ衣をよきさ様

きしの毛ともいふし羽の毛也かゝれはよきや
手に抱て見ても鷹は野也
あるまりの見れるる中をと鷹の羽に
おほいきほいは野らの毛まもい
山されの松まや風をれいきらん
山され野きたるは日かゝや百首にあり
鷹も身ちら霜乃さゆる毛
さゆる夜は毛とりも有りこしの上のよき毛
鷹に打ちしるおほつかなるかき也して
鷹みはあつさる鷹の出さうしは
鷹もしは尾の毛や所ありかよき也
鷹の立ゆく楯と云はし大鷹等にある

又スハム鷹匠

ゆきもよひ雪のさかろいけら

ゆきもよひとは雪ふりて ゆきもよひ

ふきくだる神のまつる鷹のまねきせし歌

まほとみ出したらのうへつ付

又ふきこはしの旅毛の鶴の毛のしろくなるより

大のこゑここは山にも類みけこ分

月も夜まゑ乃鷹はなる縄

夜まゑこハ鷹をよるもねる鷹をあけられ

またおかなし人をすハあしらふ大鷹を呼ひとて

呼子鳥乃つきそ付て呼わるをとりの大鷹に出る

生の

戸ほはしらとほるさぬ閑をとよもゆくし

ニ雪かゝりぬ鷹も乃人おもらん

形いくつ三一年雪居あいて毛をとり天かれぬ

二年とらかりの三年とハかりをとしぬ作くる四

年より四とめまでもけふて雪ぬとしぬ

松くろの年つきもみ葉の乱くなり

またおれ鷹のちわりあしぬきり

山も雪ねく声さこまさまさらん

のりも毛乃くろのひあし体なり

初の毛こらこ栗毛やれいさいつのかりうしかいこと

まちたく八綿かまのかくし白かも毛にくくあらやまとこ

小毛をとひねまて毛きん白有りあり

巻川ゆかり鷹ま流たも伝たるなり文

みなかみに鵜飼むかふもとりぬらん

武士乃駒のあしなみそろへけふ行くも

鳴もかしこみ乃をのゝ鷹狩

かりしたの日頃の人をよもこうし

鷹杖ならし山ゆかしくらん

〇〇川へかりの法〇〇之 紅葉狩のかへさや

鷹たてし袖やすは毛乃ゆく衣

ゆく衣にはなれし毛のうさ衣乃毛のほころや

あ〇まのこころもちに鷹〇〇羽

通羽や

たつ乃新鷹の月もあらためく

たゝなはしにあらふ庭にをの鷹

〇〇に〇尾花ゆゑや矢乃羽をわするゝ

ゆくゝやをとしはちゝ家のむれの〇しく

さいぬるや人乃〇〇けむもものむらん

〇をけに六尾の〇〇鈴付乃下や

百首ニアリ

うけを鷹に小たかろよいられ

鳥よわも気乃ひまつかりねく

あ〇〇らたらの陰をこすりもがな

神もおりしきにみぬるろ乃ニ滝の山

いろまろたらのあをのやくらん

吹おろす木葉にろうよ風見えて

羽乃きてたか鷹の羽かるや 百首ニアリ

〇〇〇〇〇はき鷹乃〇羽

九州大學圖書印

袖のこを姿のにかは錦やみ年
謡一方地をてしめ行山こは鶯𪚲

九州大學圖書印

五十五